

利根川水系における外来魚カラドンコの定着のおそれと食性

○内田大貴・加納光樹（茨城大学広域水圏環境科学教育研究センター）・松沢陽士（松沢写真事務所）
・山川宇宙（筑波大学山岳科学センター菅平高原実験所）
・増子勝男（土浦第一高校）・岩田明久（京都大学）

カラドンコ *Odontobutis potamophila*（図1）はドンコ科ドンコ属の純淡水魚で、ベトナム北部から中国東部地域の揚子江・黄河・閩江水系中下流域と湖沼に自然分布する。国内では、2017年に茨城県西部の菅生沼に流入する江川とその周辺水路ではじめて生息が確認されたことが知られている（福地ほか，2018）。しかしながら，江川を含む利根川水系では分布・生息状況について十分な調査が実施されておらず，また，食性等の生態学的知見も不足しているため，具体的な対策を検討しにくい実状がある。

本研究では，利根川水系で過去に採集されていたドンコ属魚類標本を精査するとともに，2018年5月中旬から6月上旬に江川で本種の生息状況調査を行い，導入年代や分布・拡散状況について整理した。博物館・大学等に保管されていた標本を精査したところ，本種はすでに2010年に菅生沼で採集されていたことがわかった。また，2011年から2017年には菅生沼の流入河川の江川や流出河川の飯沼川に接続する水路，さらにはその下流側の利根川本流でも採集されていた。なお，2018年5月下旬には江川で本属稚魚5個体（体長12–18 mm）も確認され，成魚の出現状況からはカラドンコの稚魚である可能性が高いと考えられた。以上のことから，本種は少なくとも江川で再生産している可能性が高く，また，利根川本流へと分布を拡大しつつあると判断される。

江川での生息状況調査で採集された20個体（体長42–162 mm）の胃内容物を精査したところ，本種は魚類（ギンブナとドジョウ），エビ類・ザリガニ類（カワリヌマエビ属の一種とアメリカザリガニ），水生昆虫（コガタシマトビケラ属とガガンボ科の幼虫），貝類（サカマキガイ），陸生節足動物（オカダンゴムシ）を摂餌しており，また，成長するにつれてより大きな餌生物を利用する傾向も認められた。在来のドンコは大型になると他魚種を捕食するようになるが，そのような習性は本研究のカラドンコでも認められた。

今後，カラドンコの生息数が増加した場合には，捕食や競争によって在来淡水魚類相に何らかの影響を及ぼすおそれがあり，駆除や分布拡大防止などの対策は急務であると考えられた。



図1. 利根川水系江川で採集されたドンコ属魚類の画像
（上，カラドンコ，体長64 mm；下，ドンコ属稚魚，体長12 mm）